第86号
2022/7

# PVかながわ ニュースレター

News

## 「みんなのおうちに太陽光」キャンペーンの受付中！
## ～蓄電池だけでも みんなでお得に購入が可能～

本誌第57号（2020/02）でも一部紹介したが、太陽光発電システムの県のグループ購入事業「みんなのおうちに太陽光」キャンペーン（https://group-buy.jp/solar/kanagawa/home参照）は今年度で4回目で、購入プランは太陽光発電、太陽光発電＋蓄電池、蓄電池と、**蓄電池だけの購入プランも可能になった。**

大手電力が発表した8月の電気料金は、原油価格の高騰の影響で大きく上がり、前年同月と比べると東京電力で31.0%、中部電力で32.2%も高くなっている（電力使用量が260kWhの平均的家庭の場合で朝日新聞調べ）。その結果、買電価格は再生可能エネルギー発電促進賦課金を加えると30円～34円（1kWh）にもなる。会員の多くは導入後10年以上経過して卒FITとなっているので、売電価格は8.5円（東電の場合）で、売るよりも自家消費した方がはるかに得なことは明かだが、実は、これから太陽光を購入する人にとっても、同じことが言えるようになってきた。太陽光発電設備の導入価格は約29万円/kWで（2021年4月、資源総合システム調べ）、1kWの設備は1年間に約1,000kWhは発電するので、15年間では約15,000kWh。導入価格29万円を15,000kWhで割ると、導入コストは約19.3円/kWhと計算できる。つまり、買電価格より導入コスト「太陽光発電で電気を作って使うコスト」の方が安くなってきた。電気は買わずに作って使う時代になったのだ。

しかし、晴れている昼間はよいとして、雨の日や夜の使用分への対応が問題になる。蓄電池を導入して昼間の余剰電力を蓄電池に貯め、夜に給電する。しかし、蓄電池は依然として高価（6kWhで200万円程度）で、蓄電池の導入費用を考慮するとコスト計算ではまだ安くない。今回の蓄電池共同購入価格は、大容量のハイブリッド蓄電池（蓄電容量: 9.80 kWh、オムロン社製）で1,672,000円（25.9% OFF）、小容量（蓄電容量: 7.40 kWh、ニチコン社製）で1,474,000円（21.1% OFF）だ（資源総合システム社の調査結果による市場価格との比較）。この程度ならば購入してもと思われる方はキャンペーンに参加してみたらいかがか？

左に記載したURLから登録が可能で、8月31日（水）までに判断すればよい。7月2日現在の登録数は1914世帯だ。オンライン説明会も無料で視聴可能で、所用時間は約25分程度だ。（田辺記）

## 世話人から

**連絡事項**

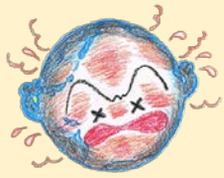
先月は、3年ぶりの横浜開港祭が開催され、コロナ禍からの復活の兆しもありましたが、新規感染者が、県内でも増加傾向に転じ、今後のイベントに対し、暗雲が立ち込めていますが、計画だけは検討を続けたいと考えております。

**今後の予定**

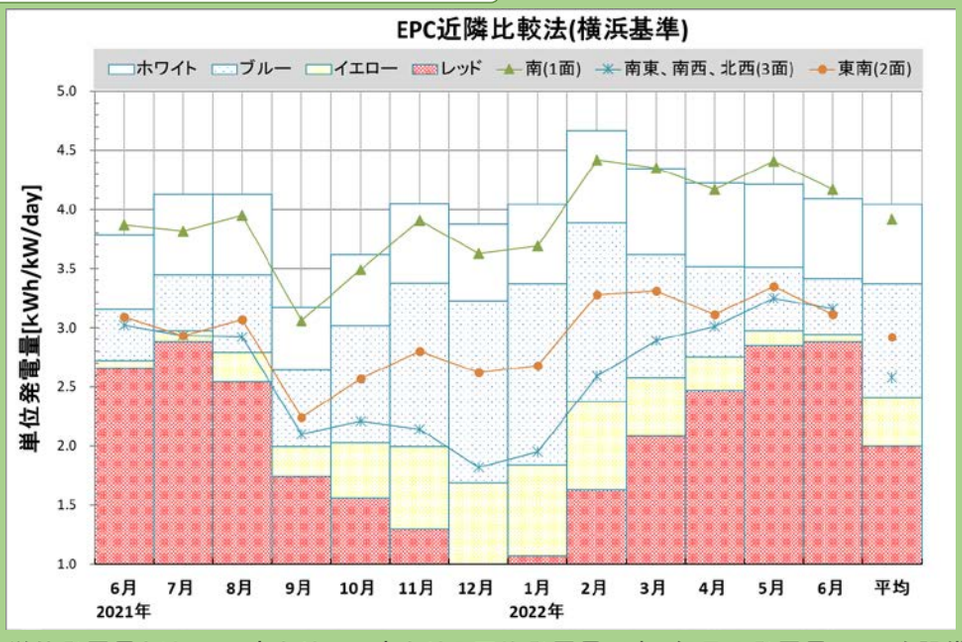
**「太陽光発電所ネットワーク 2022年度通常総会」**
日時：7月31日（日）13:00～
Zoom使用で、詳細は別途本部より案内があると思います。

**「出前発電所をつくろう！」ワークショップ第34回**
日時：10月30日（日） 13:20～
会場：かるがも（星川駅）
（計画中！）

**「まなぶんまつり」（保土ヶ谷）**
日時：11月15日（火）、16日（水）
会場：保土ケ谷区役所 地下会議室
（開催企画を検討中！）



## 今月の単位発電量！




6月の日照時間は横浜では前年比+16.4%である一方、小田原では前年比-3.1%となり、同じ県内でも地域差が顕著でした。気象庁によると「上旬～中旬にかけて、北・東日本では、オホーツク海高気圧などから流れ込む冷たく湿った空気の影響を受けやすく、曇りや雨の日が多かった。下旬は、太平洋高気圧の北への張出しが強まり、梅雨前線が北上し、東・西日本の各地と東北南部では記録的に早く梅雨明けしたとみられる（速報値）。月降水量は、北日本日本海側と北日本太平洋側でかなり多かった一方、西日本太平洋側でかなり少なく、気温は、月の前半は冷たい空気が流れ込みやすく、全国的に平年を下回ったが、後半は太平洋高気圧が強まり、全国的に暖かい空気が流れ込みやすくなり、高気圧に覆われて晴れた東・西日本を中心に平年を上回った。」

単位発電量とは、1kWあたり、1日あたりの平均発電量です。毎月の発電量[kWh]を設備容量[kW]と日数で割ってください。
平均は直近12か月の単位発電量です。一般的に単位発電量は、ブルーの範囲になることが期待されます。北西など、やや北向きがある発電所はイエローになることもありますが、レッドが続く場合は、メーカなどに相談することをお勧めします。
※近年の太陽光システムは均質化や効率改善が進み、2000年初頭の物に比べ、実発電量が10%以上多くなることもあるので、補足としてホワイトを設けました。